

資料をよむ

～資料としての青年団機関誌～

民俗・地誌部会部会長 中野 泰



はじめに

民俗・地誌部会においては、人々の生活とその移り変わりを調査し、記録する試みを始めている。ここでは、その成果の一つとして刊行する調査報告書『砂川青年団資料集—青年団機関誌『いづみ』・戦後砂川青年団についての座談記録—』に掲載した青年団機関誌を読み解いてみたい。

『いづみ』は、第二次世界大戦後の昭和25年（1950）から昭和50年代まで、砂川青年団の文化部によって発行された機関誌である。機関誌は、巻頭言、発刊に寄せることば、団員の声、青年団事業計画や各部だより等で構成され、素朴で味のある図版とともに、ガリ版刷りで刊行されていた。それは、コンピュータグラフィックスが開発される以前を若者として生きた世代、すなわち、今日においては、現役を引退した70代から90代の方々の、手作りの作品と言える。その記述には、生活環境の整った今日においては想像することが難しい内容も少なくなく、まるで異文化のように受け止められる点もあるだろうが、当事者達自身にとっては、若かりし頃を追慕したり、俳句・詩を楽しんだりすることができるものもある。以下では、地域社会の歴史や文化を明らかにする方法、つまり、学術研究調査の資料としての読み方を試みてみたい。



1. 盆踊りと青年団

敗戦後、新たに発足した各地の青年団は、新たな時代に向け、旧来の制度、陋習（わるい習慣）、価値観を改めようとする志と情熱に包まれていた。戦後に再発足した砂川の青年団も例外ではない。例えば、青年団長が綴ったと思われる文章には、荒廃した焼跡を背景に伸びていく雨後の若葉に喻えて、文化国家再建に向けた勉学、運動、勤労の必要性が、青年の可能性と美しさとともに謳われている（「巻頭言」昭和二十五年春季号）。当時の『いづみ』からは、このように、新たな文化や国家を創り出そうとする心意気を随所で感じることができる。

盆踊りを例に、各部だよりを読み比べてみよう。昭和29年（1954）の文化部では盆踊りの「健全化」を主旨として、青年団の本部会議、支部長会議を開き、婦人会とも懇談を重ねて必要性を共有し、盆踊りの「模範的な型を創り出そう」とした。だが、結果として「各地」各様のやり方で盆踊りが実施されるにとどまった（「文化部の事業に付いて」1954年秋季号）。青年団を構成する地域単位である支部の意向が強く、本部が進めようとする方向性へなかなか同調しなかったのである。「模範的な型」を創出しようという意図の背景には青少年の風紀を維持しようとする行政の意図も垣間見えるようである。その後も盆踊りの改善は計画にあがり（「社会部経過報告」13号 1958年）、練習日を長く確保したい、盆踊り発表会を1日だけでなく、2～3日かけて行いたい、コンクール的に行いたい等の要望も会議にのぼり、ようやく、5年後に「統一盆踊り会」を達成することができた（「社会部事業を顧みて」16号 1960年）。砂川の風物詩には「砂川音頭」がある。1950年代初頭に制作された「砂川音頭」の数年後において、盆踊りを統一しようとする機運がなぜ、どのように



写真1 『いづみ』表紙 見開きは16号 1960年

して生まれたものなのか、興味深いところではないだろうか。各部だよりという項目は、青年団の事業報告の欄になっており、経年的に読み比べてみることで、青年団活動の変化を読み取っていくことができる所以である。

2. 生活改善の試み

同じ改善という言葉を用いて、家庭生活のそれに重きを置くものを「生活改善」という。国が進めた政策としても知られる。砂川の青年団においては生活改善を複数の部で担当した。文化部においては「女性の集い」という話し合いを開き、自主的な女性による営みにしようと試みていた。ある年の「女性の集い」は、家事労働の改善を話題として「余暇の善用」と題した講演が行われ、余暇の過ごし方が話し合われた。折しも、「毎日が戦争」の様な蚕の最盛期で、多くの青年女性は余暇がなく、参加者は40名余りであった。文化部長は「昼休に女のは洗濯をしているのに男のは昼寝などするのが現状ですが此れなど自分の兄弟に自分の物はさせる様にする」等と講評した（「女性の集い」1954年秋季号）。盆踊りとはまた異なった意味で家庭生活の改善は容易なものではなかった。しかし、機関誌には、家の行事の改善を試みた例も認められる。それは、農家の長男であるにもかかわらず、結婚式を改善した内容である（「厚き壁を破って」14号 1959年）。自宅ではなく、都立西多摩婦人生活館にて結婚式を「新しい形」で行った青年は、当時の準備、式次第を詳述し、「厚き壁は外的的なものばかりではなく、自分達自身の心の中にある厚い壁を打ち破る事が何よりも第一に必要」と所感を綴っている。この文章からは、青年団活動を自らの生き方へ発展的に解消していく姿を読みとることができる。結婚式の変化については、家で行う結婚式（かつては祝言と称した）が結婚式場で行われるようになったと図式的に理解されているが、この例のように、結婚式を家制度ではなく、資本を背景とするサービス産業でもなく、手作りで行っていたという史実が立川市内にもあったということが、この文章から明らかになる。



写真2 都立西多摩婦人生活館での結婚式
新郎新婦や両家の参列者へ盃が渡されている様子
(豊泉喜一氏所蔵写真)

3. 資料としての『いづみ』の意義

『いづみ』から浮かび挙がってくる青年達の経験や考え方には固有の背景がある。民俗・地誌部会においては、主として聞き取り調査によって、その地域的な背景と生活変遷を明らかにしようと調査研究を進めている。青年団の文書記録をはじめ、役場文書、都や国の行政文書資料等と関連づける作業も欠かせない。この機関誌には、全国的によく知られている砂川闘争に関連する文章も収録されており、多方面への活用が可能と思われる。

『いづみ』の頁を繰ると、少なからざる読者は、今日のご高齢の方々が若かりし年代に綴った「文集」とでもいった性格をそこに感じるかもしれない。しかし、だからといって軽んじて扱うべきものではない。『いづみ』は、歴史や民俗を読み取る資料としての意義を豊かに有しているからである。後生の者がこれからの社会や未来を考え、豊かにしていく上でも顧みることができる資料としての意義をも有しているのである。

今後とも、このような資料の発掘に努力していく予定であるが、関連する資料をお持ちの市民の方々へ、末尾を借りて、ご協力を改めてお願いする次第である。